

千葉省三童話全集

(第五卷)

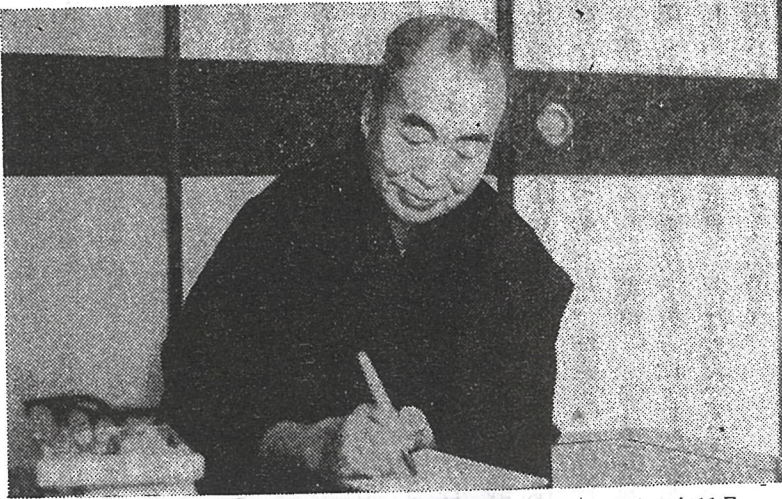
5 報 月

目次

省三文学について……………滑川道夫(一)
千葉省三の童話……………いぬいとみこ(二)
編集者としての千葉省三……………藤田圭雄(四)
わたしと『虎ちゃん』……………後藤樹根(五)
千葉さんの童話……………坪田譲治(七)

東京都文京区
水道 1-9-2

岩崎書店



千葉省三氏 昭和42年11月

千葉童話の本質

千葉省三の「童話」に与えられるいくつかの言葉、村童もの、土のにおい、リアリズム、その言葉は数々ある。そしてまたその童話を紹介する文章は如々にあるが、その本質を捉えた研究はまだ少ないように思う。そうしたよく知られた短篇童話の他に本巻所載の菅忠道氏の解説にあるように大衆児童文学の諸作をもあわせて本質論がまともな面白さだろう。月報当号、いぬい氏の文中、虎ちゃんが作者自身でなくフィクションであったことへの驚きを書かれているが、単に「思い出」ではなくもっと別なところに作者の視点があったのだろう。

省三文学について

滑川道夫

五年前の夏、宇都宮大学の「児童文学」を集中講義にしてもらって四泊五日の予定で出かけた。千葉さんの作品の舞台になったふるさと近くだから「千葉省三論」を題目にかかげた。児童文学を聴講する学生が一六〇名もいたから、ふるさとの児童文学者の主要な作品はほとんど読んでいるだろうと予想していた。そこで「虎ちゃんの日記」——を読んだ人手をあげて」ときくと一本もあがらない。「乗合馬車は?」「梅づけのさらは?」「わんわんものがたりは?」一本の手もあがらない。わたしはいささかたじろいで「千葉省三」という作者の名前は知っているだろう」というと「全然知らない」という。郷土の作家として山本有三を知っている、千葉省三を知っている学生がいないのである。児童文学者として賢治・南吉・栄・鳩十の名があげられても、省三の名がでてこない。

わたしは啞然としたが、考えてみるとむりもないことだと思直した。むしろ「童話」の愛読者だった上の世代の人なら知っているかもしれない。戦後千葉省三が再評価されてきたといっても、せまい児童文学界だけの出来ごとで、一般的にはそれほどまでに知名度が低かった。卒論に千葉省三をとりあげる学

生があらわれてきたのはごく最近のことである。

この全集が完結すれば、おそらく、賢治・南吉・栄などと肩を並べて卒論の対象になるにちがいない。

千葉さんの後期の作品のなかにはジュール・ベルヌの作品の翻案「陸奥のあらし」のような大衆文学性をもったものもあるが、本流は「トテ馬車」「竹やぶ」「葱坊主」「地蔵さま」に収められた短編にあるだろう。ふるさと栃木の、その時点の生な郷土性が子どもの生態のなかに息づいている諸作は、今日なお生新さを失っていない。

生活綴方的な方言を駆使し、子どもの生活の光と影を立体的に描きだしている。単にその時点の子どもの現実をビビッドに描写しているのではなく、子どもの心のうねりを表現している。創作童話時代とよばれる童心主義文学のなかでの郷土性・生活性・現実性を造形していることは、当時の潮流に対する新鮮な文学創造であった。作家の主体性としては「童心の世界の一番いきいきとした表現」（日本児童文学全集第五巻・河出書房・昭二八）の追及であったとしても、作品の成果としてはむしろ「童心の世界」をはみだす子どもの興奮とエネルギーが放出されているように思う。

そこには子どもの生活が活写されているというよりも、十分に構成された努力に支えられた人生の影が創りだされている。郷土的社会的背景がほんもののユーモアと切り結んで、すみ絵のように会話の底を流れているのが感じとられる。

そこにおとも共感する世界がひらかれている。そして会話描写の巧みさと展開が、読者の心をしっかりと把える。登場人

物と作者との心の高まりが、そのまま読者に働きかける文学形象の頂点に会話が位置を占めているところに省三文学の独自性を見ることができよう。

千葉省三の童話 いぬいとみこ

私は千葉省三さんの童話の研究者ではないので、前期の作品がこうで、後期の作品がこうで……といった、考証を述べることはできない。

昭和三十五年のある日、私にとってはほとんど「伝説」的存在である、「虎ちゃんの日記」の著者にお会いすることのできた仕合せを、今もけっして忘れることができない。岩波少年文庫の『とらちゃんの日記』の解説を書いて頂く鈴木晋一さんと一しょに、小平学園のお宅をお訪ねしたのだったが、雑誌『良友』や、精華書院刊行の『不思議の国のアリス』や『アルプスの山の娘』などの編集者だった中村勇太郎さんも同席されて、いろいろ往時のおはなしを伺うことができた。

千葉さんも中村さんも往年の名編集者らしく、戦後の児童文学の同人誌による若い作家たちのことや、戦後新たに紹介された海外の児童文学にも、かなりのわかかわかしい知識欲をみせていらしたのには、失礼ながら、すっかり感嘆させられた。

私たちは、省三文学を、素朴な「思ひ出の文学」、「少年期のリアリズム文学」というふうに、単純に見すぎているはしなかったろうか。こんどの全六巻の童話全集が刊行されるのに先立って行われた座談会で、関英雄氏が

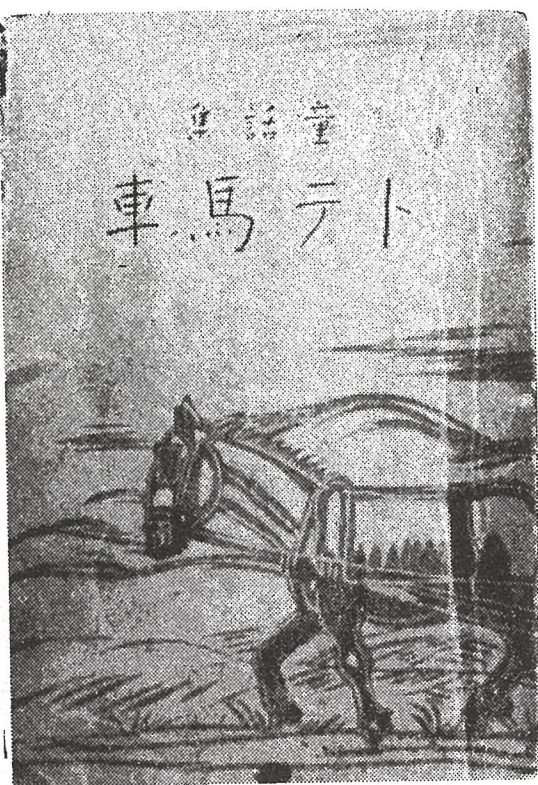
「(略)虎ちゃんという主人公は、あれは千葉先生の少年時代の

が現われたのは、作家の素朴な幼年時代の回想や懐古の情とは別の視点から、それが創られたためではないか。

すでに少年時代に、省三によって価値を与えられ、自分な魅力をもつ「理想」の少年像として捉えられたいくつかの姿が、ふるさとの風土の舞台の上に改めて大人としての省三の手で再生されている——まったくの素朴な「私小説」の風味のもとに、さりげなく提出されているが——その点、読み手がベッタリの童心主義的リアリズム感で読めば、省三のフィクションへのかんがりの工夫は当然見のがされてしまうだろう。

「虎ちゃんの日記」は、しばしば「トム・ソーヤーの冒険」に比較される。私もそれはもつともであると思う。そして今にして思えば、すでに外国の児童文学の本質も理解し、そのいい加減な形の翻案、和文和訳のむなしさも知りつくしている著者によって、日本で初めて、大人とは別の少年特有の価値判断に統一された視点から、作品を構成しようとの意図のもとに文学が作られようとされた結果、「虎ちゃん」と、「トム」の相似が生まれたのではないだろうか。従来の童心的芸術的児童文学では避けられなかった、大人としての作家の感傷性や、きみのわるいまでのナルシズムが「虎ちゃんの日記」他の千葉作品には、みごとに排除されている秘密は、このへんにかくされているのかもしれない。千葉省三は「子どもが小型にした大人ではない」ことを、全力をあげて作品で証明しようとした作家であり、童心だけあって、生きた子どもへの関心不在の日本児童文学の中では、とくに光った存在であることは否めない。

また、都会的小市民的な児童文学の標準文体をすてて、大胆



童話集『トテ馬車』昭和4年・古今書院版
「虎ちゃんの日記」所載

ことじゃないかと、私なんか昔そう思っていたところが、そうじゃなくて、つまり虎ちゃんはイコール千葉さんの子ども時代ではない(略)むしろ敬ちゃんなんか近かった……(注)という発言をされていたのが、私にはとくに興味深かった。

「虎ちゃんの日記」の冒頭の、「この日記を聞いた虎ちゃん

は、じつは小さい時のわたしかもしれない。」という著者のことばに、——その巧みなフィクション力に、われわれは長い

間、眩惑されてきたのではないか……。

つまり、従来の日本のお上品な童話の主人公よりも、より野性的であり、力づよさや、子どもらしい反骨まで備えた「虎ちゃん

の日記」の虎ちゃんや、「けんか」の丑、「乗合馬車」の原

んぼの善や、「定ちゃんの手紙」の定吉などの魅力ある主人公

に方言を使用したことについても、心からの讃辞を呈さなければならぬ。

私たちよりさらに日本を——そしてふるさとを知らない現代の子どもたちが大人になるまでに一回は、「虎ちゃんの日記」や「タカの巣とり」を読んでもらいたい。そして少女たちには、「梅づけの皿」を味わうことをとくにすすめたい。

(注) 千葉県三童話全集第一巻 月報1 7ページ。

編集者としての千葉県三 藤田圭雄

雑誌『童話』は、大正九年四月から、大正十五年七月まで、あしかけ七年間に、七十五冊が発行されている。そのうち千葉県三が編集をしたのは、創刊号から、大正十三年五月号までの四十九冊である。

『赤い鳥』の創刊が大正七年七月で、『金の船』が大正八年十一月であるから、『童話』はだいたいぶゆつくりとかまえていたことになる。その間千葉県三は、「大正七年の秋『赤い鳥』が初めて発行されて、それを手にしたときにはさすがに驚かされました。」とはいいながら「でも、同時にいくつかの疑問もありました。この人たちが、はたしてどれほどの熱をもって執筆してくれるか。創作童話を生むというより、文壇人に書かせるということの方に力を入れていっているらしいが、新運動としてこれではいだろうか。」という批判の目をもつて、自分が創刊をまかされた新雑誌の構想を練っていた。それだけに、新しく生まれた『童話』は、『赤い鳥』と違った色合いを出す為にいろいろな苦心が払われていた。



雑誌『童話』大正14年7月号

あったのが、大正十一年四月号からは、藤森の代りに西条八十に依頼し、八十と赤彦による独自の童謡運動を展開している。『赤い鳥』の鈴木三重吉はその強い個性をつらぬき、外国の名作の再話と綴方運動に特色を持ち、『金の船』『金の星』の斎藤佐次郎は、児童文学の普及に貢献があり、それに対して『童話』に拠る千葉県三は、童話童謡の創作に着実な地固めをして来たということがいえるのではないか。

編集者としての千葉県三には、鈴木三重吉のように、文壇への華美な働きかけもなく、斎藤佐次郎のように、音楽会や、観劇会、講演会を催すという積極性もうすかったが、自分自身で着実な、リアリズム童話を書きながら、創作童話の根底になるものを雑誌の上で求めつづけて来たといえる。その意味でも今

今日、『赤い鳥』と『金の船』『金の星』と『童話』とを比較して読んでみると、いろいろの点で、それぞれに特徴がでておもしろい。ここではそれに触れている余裕はないが、『童話』が、『赤い鳥』その他の雑誌とならんで、あの大正の中期に、輝かしい存在を示したのは、何といっても、この千葉県三の、落着いた達見によるものといえる。

千葉は新雑誌の構想として、「まず第一に、厳正な意味での創作童話を必ず巻頭にのせようということ。」「次に、ほんとうに童話童謡に打ちこんで書いてくれる新人を探し出すこと。」「第三に、日本の土に生まれた郷土性のある童話童謡を尊重しようということ。」「という三点をあげている。

そしてこの趣旨から、相馬泰三の「桃太郎の妹」宇野浩二の「西遊記」佐藤春夫の「蝗の大旅行」小川未明の「港に着いた黒んぼの話」長田秀雄の「大仏開眼物語」吉江孤雁の「角笛のひびき」をはじめとする一連の物語その他、たくさん名作を生み出している。それは、鈴木三重吉による、外国の名作の再話を中心にした『赤い鳥』とはまた別な、地味ではあるが、しっかりとした一本の支柱に貫かれている。

その上、大正九年十二月号には、長田秀雄、相馬泰三、室生犀星、与謝野晶子、北村寿夫、蘆谷蘆村による童話劇の特集、大正十一年十月号では、八十、白秋、雨情、露風、赤彦をそろえた童謡号、大正十二年九月号は、相馬泰三、北村寿夫、松本泰、水谷まさる、西条八十による探偵奇談の特集などという、それぞれ特徴をもった編集もしている。

童謡も、大正十一年三月号では藤森秀夫と島木赤彦が中心で

日の時点に立って見たとき、『童話』が、その後の日本の児童文学に寄与した貢献度は高い。

千葉県三は創刊以来ずっと、応募童話の選もして来たが、その応募者は童謡の応募と重複するものが多く、『童話』の童謡欄はどのにぎわいはなかった。島田信一、長野昌水、柴野民三、山田(奈街)三郎、吉岡伊三郎、島田忠夫、作間博、船木枳郎、戸塚博司、平林武雄、鹿山映二郎、大谷真砂一、長島龍雄、大島重三、北井慎爾、浦山琴子その他、童謡欄の常連にまじって、大島敬司、平塚益徳、森三郎、田辺耕一郎、菊田一夫などという顔も見える。野村七蔵の本名で異聖歌の名前もある。しかしこれら若い童話作家を養成した功績より、西条八十の起用によって、『童話』の童謡欄がすばらしい充実を見たことの方が、編集者としての千葉の手柄である。

千葉県三のように、見識もあり、しかも着実な編集者を得たことは『童話』にとって最高の幸せであったといえよう。

わたくしと『虎ちゃん』 後藤樞根

わたくしの小学生時代は、今から考えてみると、第一次の綴方教育のさかんな頃だった。

高等小学校一年生のときの担任教師の、大神先生がなくなられてから、わたくしの文学少年の芽が出た。大神先生はお寺さんで、俳句を作っていた関係上、当時の綴方教師だったようである。わたくしは、そのとき、大神先生から、詩というものを初めて聞き、綴方を初めて習った。文章を作る作文から、自分の生活を綴る綴り方を教えられて、童話を作ることも知った。

しかし、当時「赤い鳥」は出ていたはずだが、それは知らず、「児童の綴方」とか「児童の心」という雑誌を読まされた。しかし、それも学級にある一冊を、読むことが出来るだけで、自分で買ってもらうことはできなかった。そして、その頃から、詩や俳句、綴方などを、東京の雑誌に投書することを覚えた。

高等小学校を卒業して、大分市の予習学館という、師範学校の予備校に入学して、初めて、町の書店を知った。そして、「赤い鳥」や「金の星」「童話」などの雑誌を知って、胸のときめきを覚えた。書店の店頭でそれらの雑誌をめくって見たが、九州の田舎者のわたくしには、「童話」が一番親しめた。

「赤い鳥」は、わたくしども田舎者には、なんとなくハイカラくさくて、童話も童謡も都会的な匂いがして親しめない。

「金の星」は、活字からくる感じがスマートに感じられない。ところが、「童話」は、第一、川上四郎先生や河目悌二先生の表紙絵や挿絵が、田舎の子ども向きで、わたくしにはびつたりだったし、童話や童謡も身近かなものを感じさせた。わたくしは少い小遣いの中から、毎月「童話」を買うことにした。

しかし、わたくしは、その頃童謡に夢中だったので童話の方は、軽く読むくらいで、あまり強く心をひかれなかった。ところが、千葉先生の「虎ちゃんの日記」にはガクンときた。それに、川上先生のあの絵がたまらなくわたくしの心をとらえた。

童話というものは、おとぎばなしか、外国の話、それから神話みたいなものだとばかり思っていたわたくしにとって、「虎ちゃんの日記」は思いもかけない作品であった。川上先生描く田園風景も、わたくしの郷里のそれと少しも変わらない。わた



千葉省三氏・昭和42年秋

くしは何回も読み返しながら、この虎ちゃんというのは、自分のことではなからうか。千葉先生という人は、自分のことを、どうしてこんなによく知っているのだらうかと思うくらいだった。虎ちゃんたちの姿が、わたくしや、わたくしの友だちの姿とダブって、とても他人事には思えなかった。

しかし、「童話」はすぐ書店に來なくなった。休刊になったのであった。

それで、わたくしは、千葉先生から遠ざかった。師範学校に入学して、屋田俊三や中川武と詩や童話を目の色をかねて作りだしていたので、童話から離れてしまったのである。

生がわたくしの前に現われた。

古今書院から出た「トテ馬車」を、書店で見つけたからであった。わたくしは、「トテ馬車」を、綴方の授業の教材に使った。研究授業のとき、他の先生から、「童話などを作文の教材に使うと、子どもは、空想に走りすぎて教育上よくない。」など云われて、大喧嘩したこともある。

わが尊敬する千葉先生の作品に、ケチをつけられてはたまらなかったのだ。それで、わたくしは「赤い先生」のレッテルもはられた。昭和初年の教育界というところは、そんなところだったのである。

その間、わたくしは新興日本童謡詩人会などという大それた名称の会をつくって、「童謡詩人」を発行した。東京の雑誌に負けたくないというヤセガマンから、厚かましくも川上先生にねだって、雑誌の表紙やカットを書いてもらったりした。そして、川上先生と千葉先生は隣りに住んでいることを知り、なんとか千葉先生に知られたいと考えて、島田忠夫を通して、千葉先生の生活のことなどを島田に書いてもらったりした。

しかし、童話を書くことをやめていたわたくしは、その後も千葉先生とのつながりをもつことは出来なかった。

そのわたくしに、童話を書く機会が与えられた。「大分新聞」の学芸部に友人がいて、その友人に、「東京から廻ってくる新聞小説なんかより、オレの小説を出せ。子どもを主人公にした、すばらしくおもしろいものを書いてみせる。」と、けしかけたものだ。そのとき、わたくしの頭の中には、「虎ちゃん」があった。わたくしの自叙伝を小説にしようと考えていたの

だ。あの「虎ちゃんの日記」のように、一人称で。

友人は、わたくしの意気どみに屈して、「よし、書け。そのかわり原稿料なしだぞ。」ということになった。

わたくしは、さっそく書きはじめた。後に本になった「村童日記」である。ところが、わたくしの作品が新聞に出る前に、坪田譲治先生の「子供の四季」(？)が、東京の新聞に出はじめた。それで、友人は、「なんだ、君は、あれのまねを書くのか。」ということになって、「村童日記」は十回分ぐらい書いたところで、お庫になった。

その後、わたくしは昭和十三年に上京、東京日日新聞の映画部に入ってから、児童映画の製作の仕事をした。そして、その少し前に出来た「虎ちゃんの日記」のトーキー版を、サイレント版になおす仕事を手伝わされ、再び「虎ちゃん」に接した。そして、前に三十枚ばかり書いた「村童日記」を書き上げた。それは、全く「虎ちゃんの日記」を下敷にしたものであった。わたくしの子どもの時代の実話を、そっくり「虎ちゃん」ばかりに書きあげたのであった。

千葉さんの童話

坪田譲治

私が千葉さんの童話を読んだのは、『トテ馬車』という本だったと思います。三十年も上の昔です。私はその頃、小説を書くのに、一生懸命になっていて、童話を作家のアルバイトのように考えていました。それというのも、小説だと、批評家という人たちがいて、毎月の雑誌から、目につくものを取り上げて、それぞれ評価していました。童話となると、随筆や感想と同じ

く、ほとんど評価されませんでした。そんなせいかも知れません。そんな時代に、この『トテ馬車』の評判を、どこかの新聞で見かけたように思います。それで、本屋へ行って買って来ました。

読んですぐ感じたことは、とても新鮮だということでした。そこには、日本がありました。日本の土がありました。自然がありました。そしてその時代がありました。まるで、私は郷里に帰ったような気分がしました。小春日和の温く乾いた道を、トテ馬車がラッパをならして駆けていました。

トッター、トテ トテ トテ

出て来るおとなも子どもも、すっかり田舎もので、都会人にはおそろく想像もできません。その田舎ものの色や匂のようなものが、書かれていないのに、感じられます。

実は私も田舎を書き、そこのおとなと子供を描いております。で、三十年前のその時は、それほどにも思いませんでした。が、昨日今日、「乗合馬車」だの「虎ちゃんの日記」だの「鷹の巣とり」など読んでみて、田舎の自然と、そこに住む人間と、そしてその時代を描くことにおいて、これは及び難いと感じました。小説の方では、いろいろの作品もありましたが、童話において、これほど吾が国の田舎をリアルに描いた作品はなかったのではないだろうか。それというのが、今や、吾が国の田舎は急速度で、都会化されております。田舎が田舎でなくなっているようです。

この千葉さんの童話の中にある田舎は、明治の頃と思われるますが、もうそんな田舎は、今は日本のどこにもありません。今

後はいうまでもありませんが、それに類するものもなくなって行きます。ということになると、この千葉童話は、そんな意味からも大切なものです。今頃は、古いものが否定され、新しいものが、歓迎されがちのようですが、このなつかしき千葉童話を、大切にしたいと思います。

〈新装版の読者へのお断わり〉

この月報は、初版発行時に挿入されていたものです。ですから、執筆者のなかには鬼籍にはいられた方もいますし、勤務先、肩書が現在と変わっている方もいます。そのことをお断わりします。

なお、初版第一巻の刊行は昭和四二年十月で、以後、巻数順に毎月一冊出版され、昭和四三年三月に全六巻が完結しています。

(岩崎書店編集部)